7. 終戦



昭和 20 年 9 月
広島駅の復員兵
軍から支給された被服や食糧を背負い故郷へ向う。

アメリカ国立
公文書館　蔵



昭和 20 年 9 月 18 日に撮影された東京駅前
数金さんが帰郷した頃の東京駅は屋根が焼け落ちたままですが、既に多くの人々が行き交っています。
アメリカ国立公文書館 蔵



終戦間もない頃の勝浦駅改札口
跨線橋を降りてすぐの位置に有り、駅舎や券売所は画面外左側にありました。　　提供:大野賢一　様



8 月 15 日正午、玉音放送が流れましたが、救援活動中の数金さん達は夕方まで知らぬまま帰隊した直後、上官から今までの救助活動に対する感謝とともに終戦を知らされたのでした。その晩、憤慨して刀を振り回す将校もいましたが、数金さん自身は悔しい気持ちも、ホッとした気持ちも全く沸いて来ませんでした。連日悲惨な情況下の広島市民を目の当たりにする中、「生きて勝浦に帰ることは無い」と、ある意味達観さえしていたこの戦争が突然終わってしまったという、眼前の現実のみが頭の中を行き来していたといいます。

秋の気配も感じられる 9 月下旬、復員を命令された数金さんは、支給品の乾パンや米・外套を背負い広島駅から上り列車に乗車しました。道中、ボンヤリと車窓の景色を眺めながらも、帰郷の嬉しさといった感情は全く沸いてこなかったそうです。その日は深夜の千葉駅で最終列車となり、薄暗いホームで一晩を明かした数金さんが勝浦駅に降り立ったのは翌朝 8 時頃でした。重い荷物を背負い列車から押し出されるように改札口をくぐると、傍らで乗車券を買い求める 20 人ほどの列中から突然、「あんちゃんか！」と聞き覚えのある声が耳に飛び込んで来ました。振り向いた視線の先に懐かしい姉の顔を認めた数金さんは、ひと言、「そだよ！」と、勝浦弁で応えたのでした。

再び平和な漁業生活に戻った数金さんでしたが、現在まで原因不明の頭痛に悩まされるようなります。被爆者健康手帳を交付され毎年健康診断を受けてはいますが、４５・５０・６０歳頃の３回、数日間で頭髪が全部抜けて驚いたものの、再び髪の毛が生えて安心したそうです。「若くして原爆症の癌で亡くなった人が大勢いるけど、自分は人より少しばかり頑丈だったのかなぁ」と数金さんは過去を振り返ります。45 歳頃にカジキマグロの掛かったワイヤーが巻き付いて小指を切断し、病院で抜糸の直後、「痛い痛い！」と廊下で飛び跳ねていて看護婦さんに笑われたこともありましたが、大病することもなく今年で御年１０１歳。
今日も静かな余生を送られています。